

「我は偉大なる人格者だ。

ダガバジ、マクワウリ

ダ、ダ、ダ、イスト」

熱狂して僕は吼えつゞけた。

體温は四十度を越してゐたらう。全身の筋肉がうんですえたように思はれた。

大便も板の間にしなければならぬ。

水がのみたくともめぬ。

僕はサーベルを引き抜いて、臍の眞ん中に突き刺して、生で醬油もつけずにたべてやるとか、

巡査の雀焼を頭の骨から嚙むとうまいとか。

言ひたい放題を絶叫した。

死の問題も戀人の問題も、意識から遠ざかつた。

何でも好い此の幽閉の身から解放されなければならぬ。

精力を消耗し切つた後の昂奮は、中々沈め難いものだ。